

外国語教育の「バビロニア捕囚」からの解放（一）

—「私の外国語体験」をコーパスとして—

中 西 良 夫

To see a World in a Grain of Sand
And a Heaven in a Wild Flower,
Hold Infinity in the palm of your Hand
And Eternity in an Hour.

—William Blake

序

ミッシェル・フーコーが『言語表現の秩序』の中で、ディスクールのある方を説明しているが、言語というものは三つの次元、三つの階層をもっており、学問、手続、生活という関連の中でとらえられるということであろう。この三つの階層は、最上層に学問、中層に手続、下層に生活が措定されていると考えられる。（図1）

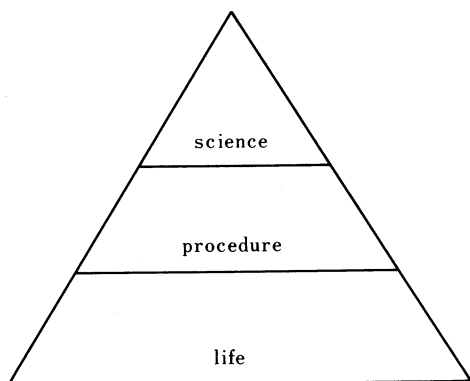


図 1

この三階層は、時間の経過とともに、歴史的に固定化され、「考古学」によって発掘調査される地層のように硬化し、一部分は断片・化石として埋没し、一つの遺跡を形成することになる。しかし、現在から未来に向っては、生活の変動とともに、手続が変更され、それを批判的に認識し、全体的な視座を与える学問も、そのパラダイムやヒュポダイムの転換が求められるに到る変化の過程を進むことになる。まさに、砂塵が吹きつけ地盤変動がおこることによって建物が傾斜していくように、この階層構造もつねに「脱構築化」の影響のもとにあるといえる。

同時に、注目しなければならないのは、学問に用いられるディスクリール、手続に用いられるディスクリール、生活のディスクリールも、相互に影響を及ぼし、つねに相互作用が行われていることである。

言語、言語表現、ディスクリールを分析する時、様々な視座からの分析が可能であるが、つねに想起させられるのは、「群盲、象をなでる」の諺である。象の鼻をつかんだ者、象の脚をつかんだ者、象の尻尾をつかんだ者は、それぞれ異った印象をもち、その印象をもとに概念を形成し、固定観念にしてしまう。または、この多様な、対立する解釈を聞いて、全体像の追求を諦めてしまう。この両極のあいだにあって、ミッシェル・フーコーが学問・手続・生活という三つの階層構造を措定し、言語という「象」に一応の見通しを与え、この三つの部分の動きと相互作用を考えるとというかたちを提起したことは、構造主義の枠をこえた議論を可能にしたと評価できよう。

小論では、日本における外国語（英語）教育を受験のための「手続」としての翻訳・文法教育から救い出すためにはどうすればよいか、「学問」と「生活」との有機的なつながりという、より大きな文脈の中に英語・外国語教育をいかに位置づけるべきか、現在の教育はいかにあるべきかを考察してゆきたい。

この考察のために、1987年3月から1990年5月まで約40ヶ月にわたって、毎週日本経済新聞に連載された約140篇の「私の外国語体験」というコラム記

事を取り上げる¹⁾。その記事の執筆者は、研究者、技術者、経済界の各分野のリーダー、ジャーナリスト、国際機関に関わる政府・地方自治体・民間団体の役職者、貿易・開発促進の機関の人々、スポーツ・芸能で文化交流に関わった人々、弁護士、女将、主婦など幅広い執筆者であり、日本人が中心であるが外国人の方々も含まれている。この執筆者の言語の学習の時期も、戦前、戦中、終戦直後、戦後と広く、また「生きた」外国語の出会いの時期も実に多様である。また、言語の種類も、英語を筆頭に、ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、イタリア語、韓国語、ロシア語、アラビア語、アフリカ諸語、タイ語、ビルマ語など多数に及んでいる。使用する言語の用途・分野も、経済・貿易、政治・法律、技術・工学、研究・教育、芸術、民間交流と広く、その学習目的も、上級学校進学、企業活動、技術指導、研究、交流、趣味、生活の中で自然に学んだなどと用途・分野の関連をもちつつ多様である。ここでは、学習の形式も、いわゆる受信型（エクリチュール型）、発信型（パロール型）、両用型とあり、学習の原理としても、よく言われるように競争原理と共感原理と二分しても濃淡の差がある。

このように、(1) 学習開始年代 (2) 種類 (3) 分野・用途 (4) 目的・目標 (5) 学習の型 (6) 学習の原理、この6つの相関を分析することを意図しても、極めて複雑な相を示す。140 篇の記事を上の6つの指標で、位置づけようとすると、開始年代 (4) × 分野・用途 (6) × 言語の種類 (15) × 目的・目標 (6) × 学習の型 (3) × 学習原理 (2) = 12,960 のバリエーションがでてくる。一つの試算として、言語について実に約13,000程のバリエーションのある記事が書れていることになる。

しかし、巻頭のウィリアム・ブレイクの詩を思い起こしてみたい。「一粒の砂の中に世界を見、一本の野草の中に天国を見るために、掌中に無限をとらえ、一時間の中に永遠をとらえよ。」

この一つ一つの記事の中に、生活の中における言語体験をとらえていくため

1) 日本経済新聞社東京本社社会部、資料部に記事の引用、著作権につき特別の配慮をいただき心から感謝し謝辞を表わしたい。

には単に直観が大切だということではない。むしろ、記事の中に明示されていないもの、多くの言明されていない暗黙的知識を一つの定焦的感知（focal awareness）を手がかりに、より具体的に引き出していく努力が必要なのである。

この努力の必要なことをウィリアム・ブレイクは次の詩で語っている。

He who would do good to another must do in Minute Particulars:

General Good is the plea of the scoundrel, hypocrite & flatterer.

For Art & Science cannot exist but in minutely organized Particulars.

—William Blake

マイケル・ポラニーのいう個人的知識をそれ自身一つの階層的宇宙として纏め上げるために、どのような作業が必要であろうか。

第一に、その個人がどのような位置・立場・状況におかれているか、どのようなかたちで投げいれられた存在か。〔存在状況〕

第二に、どのような個人的経験をもち、その個人はいかなる位置・立場・状況にいたことがあるか。〔経験〕

第三に、その個人は何を志向し、何に向かって努力しているのか、その個人のいづく目的、目標、意図は何であるか〔目的・意図〕

第四に、その個人の存在が感じている過剰と欠如、つまり何がその個人に満足感を与え、欠如感を与えているか。〔満足感と欠如感〕

第五に、その個人の書いたものの中で、隠れているもの、隠してしまっているもの、明示されていないが暗黙の前提になっているものは何であるか。〔前提〕

この五つの視座を失わないで、「私の外国語体験」の記事を分析し、その全体像を把握していくことであろう。いいかえると、マイケル・ポラニーの定焦点的意識をテコにして、その全体的、包括的な個人的知識を理解していくことが必要である。

この作業は、歌集の各詩歌の注釈をつけていく作業と似ている、根気のいる作業となろうが、いくつかを解釈し、注解をつけながら、ケース・スタディを

行うことによって、日本における外国語学習のあり方とその問題点、個人が新しく外国語に対応する時の基本的姿勢・態度が特徴的に浮び上がってくることを期待したい。また、この他者の「外国語体験」から学びつつ、現在の日本の外国語教育の欠如している諸点を考察することになる。

第一章 外国語教育の位置

「私の外国語体験」の記事の中で、各人が学校で「学んだ」「教わった」外国語（英語）をどのようにとらえているか、その学校英語が現実の生きた英語と比べて何が欠落していると感じ、その欠けをどのように克服していったかを知することは新しい語学教育の方向を模索する上で大いに参考になることである。しかし、その学校英語一つとっても、終戦を契機として学校制度が変革され、また戦争に入っていくにつれ、時間数が縮少され、ついには廃止されていくブランクの時期と戦後すぐ英語が巷に溢れるという時期などがあり、過少・欠如・過剰というサイクルが見うけられる。また英語もイギリス英語からアメリカ英語に切りかわってゆく。

このような事態を視野にいれてこの記事を読みとるためにも、外国語教育の位置を次のように図式化してみたい。（図2）

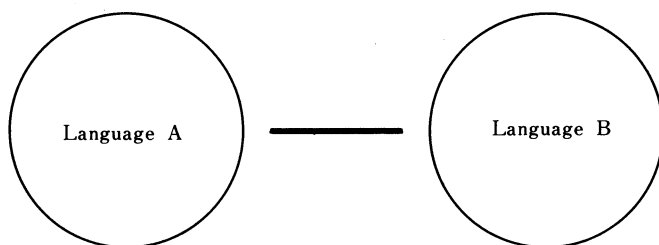


図2

A 語と B 語は、A 国の言語の総体と B 国の言語の総体を示す。それ故、A 国と B 国が接近し、国交を樹立し、経済・政治・技術などの協定を結び、両国の国民が交流し始める時、言語を媒介として様々なレベルで国際関係が出来上がってくる。もし経済的、政治的、文化的にある国が他の国より優勢、優位に立

つ場合、その言語交流の力学は普通、優秀、優勢、優位だと考えられる国の言語が習得され、優位国からそうでない国へと文化・制度・技術が流入する。

日本英語史学会編『英語事始』（ブリタニカ、1976）は、「近代日本の社会文化のいろいろな分野、たとえば、宗教、道德、教育、社会組織、政治体制、人文系諸科学、社会科学、自然科学、医学、薬学、生活風習、言語生活などの各分野が、「英語」という一外国語によってどのように変革され、近代化されてきたかを一目瞭然たらしめることを目的に企画編集されたものである。」が、たしかに英語は、日本の社会全般にわたる意識革命をひきおこしたのである。

このように、様々なレベルを考えると、この二つの円に多くの同心円が描けるであろう。そして、外周に近い円を中心に近い円のそれぞれに、比較的導入しやすく時勢に伍していくために早急に対応し、同化していかなければならないものが外周に近いところにくるし、宗教・道德など自国のアイデンティティーを守るために必要と考えられるものは、中心に近い円を構成する。この内円の方は、保守的、体制維持的であり、外庄に抵抗するために時として、反動的、時代逆行的になることも注意しておく必要がある。そして、この時代受容(迎合?)的なファクターと時代逆行的なファクター、他国の働きかけを積極的に受け入れるファクターとそれを排除・抵抗し、体制を維持しようとするファクターの中間に「教育」が位置していることもおさえておく必要がある。(図3)

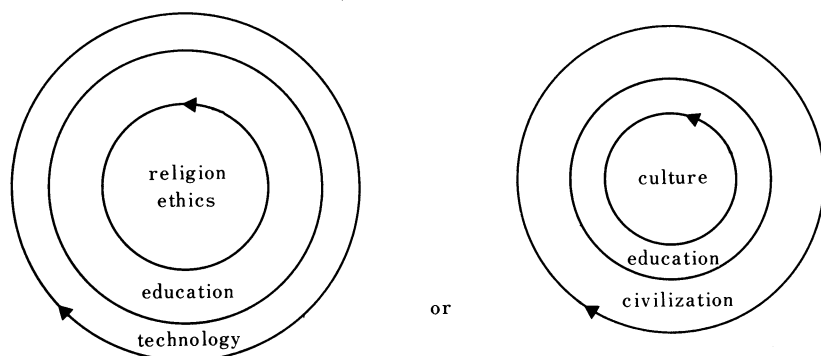


図 3

この円はいわば、右のまわる内円と左にまわる外周円という逆流する星雲にもたとえるのであって、この遠心力と求心力の中にあって、外界からの情報を管理するゲートキーパー（門番）が存在していると考えられる。この国内的な力学を調整し、管理・統制しているものとして戦前では内務省が存在したといえる。

国際関係の樹立につづいて、それを維持し、たとえトラブルが起ってもそれを修復する努力がなてされていく。外交・交渉という分野が活躍する。関係の修復が不可能となり、利害関係が衝突すると、軍事衝突・戦争という事態になり、ますます関係の修復は困難となる。これは、戦前の日米の歴史的関係を見れば明らかである。

現在のモデルとしては A 語と B 語の二つを取り上げたのであるが、国際化の進んだ今日、その関係は地球規模であるから、C 語から n 語までであることになる。それ故、図 3 に、C 語、D 語が加えられるとともに、時系列を示す縦線が加えられねばならない。（図 4）

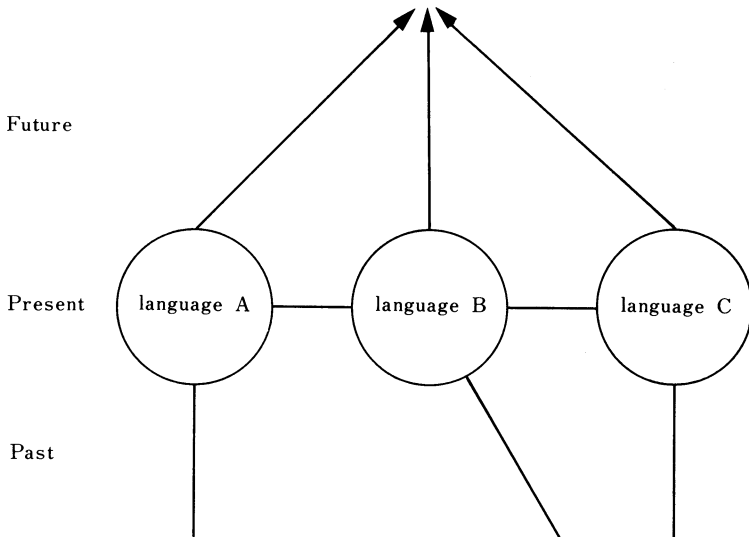


図 4

体制の違い、地理的、経済的、文化的近疎、様々な協定、条約、交流などによって、様々な動きがA語、B語、C語の間に起り、全体的には万華鏡のように変わっていく関係のあり方が現われる。殊に体制の違いによって「友好」と「敵対」と「中立」のような関係が生れるにつれて、外国語もそのような扱いや評価を受ける傾向があり、ある外国語教育の科目が、縮少・廃止・新規導入されること、またある外国語が強調・奨励されることが起るのは容易に理解できることである。

それゆえ、個人がこのように動く環境の中で、自己の犠牲と努力によっても学習が非常に困難な外国語もあれば、比較的学习しやすい、条件の整った外国語があることも理解できよう。

比嘉正範氏は、外国語教育の目的の変化にふれて総括的、結論的に次のように述べられている。少し長いが引用させてもらう²⁾。

「まず、外国語を学んだ人たちは、自発的に好んで学んだ人たちと、仕方なく、あるいは強制されて学ばざるを得なかった人たちとに分けられる。好んで学んだ人たちは、主に外国語が自由に使えることを教養の一部またはステータスシンボルと見なした社会のエリートや上流階級の人たちであった。かつての帝政時代のロシアの貴族階級は、ロシア語よりフランス語を好んで使ったと言われている。この他に、外国から物の輸入学問・技術の導入に従事した人たちも好んで外国語を学んだ。

仕方なく、あるいは強制されて外国語を学ばざるを得なかった人たちは、軍事・経済・文化の面で優勢な民族に征服・支配された劣勢あるいは弱小な民族であった。エリートにとって階級的な誇りであった外国語の知識は、弱小民族にとって屈辱的な学習の結果であった。

このような観点から、外国語を学んだ人たちをさらに細かく分類すると左記の人々ということになる。

上流階級の人たち、エリート、外交官、貿易業者、学者、研究者、外国への

2) 比嘉 正範「外国における外国語教育」『文部時報』第1231号、P 23～26、昭和54年12月

移住者、被征服民族

この人たちの外国語学習の目的や動機、状況ははっきりしていた。そのため、外国語教育も具体的にやり得たし、その実用的な効果も明らかな場合が多かった。

ところが、第二次大戦後、帝国主義や植民地主義が後退し、多くの国が民主化され、教育が大衆化されてきたため、外国語教育とエリートや被征服民族との直接の関係は薄らいできた。その結果、外国語教育の目的も変わり、これまでの外国語学習者の分類は通用しなくなってきた。外国語教育・学習の目的の見地から世界の国々を分類すると、次の三通りの対照的な範疇^{ちゅう}が明らかになってくる。

先進国—発展途上国

単一民族国家—多民族国家

国際語使用国—非国際語使用国

これら三通りの対照は三つの次元と考えるとよい。どの国もこれら三つの次元で捉えることができる。例えば、日本は先進国で単一民族国家で非国際語使用国であり、アメリカは先進国で多民族国家で国際語使用国であるというふうに分類できる。このような分類をしてみると、世界の国々の外国語教育の事情が理解または推察できる。国家全体として見た場合、日本語がもし世界で広く使用されている国際語であったとすれば、先進・単一民族である日本にとって外国語教育はそれほど重要でなかったはずである。国際語とは、一般的に国連用語、つまり英語、スペイン語、中国語、フランス語、ロシア語（アイウエオ順）ということになっている。日本はこの中から最も国際的である英語を選択し、その習得と使用に努めているのが現状である。現在の状態が続けば、そのうちに日本は日本語と英語の二言語併用国になり、先進・単一民族・国際語併用国になりうるし、またそれが日本の外国語教育の大きな目的になり得るであろう。」（波線は中西）

この比嘉論文の中で論じられている一番重要な論点は、日本は国際語併用国になれるであろうし、それが日本での外国語教育の目的となり得るという論点

である。この論点への前提になる認識として、「国が民主化し、教育が大衆化され、外国語教育とエリートや被征服民族との直接の関係は薄らいできた」という点に注目したい。戦後の復興の大きな元動力になったのは、教育の機会均等、民主化、単線化であるといわれる。そして、大衆が高等教育を受けることが可能となり、大量で均質で良質なマンパワーが経済界・産業界に供給されるようになったことは事実であり、中流意識を大多数の者が持っているという報告がなされたことも記憶に新しい。

しかし、外国語教育とエリートの直接の関係は薄らいだという認識とはうらはらに、大衆が、より多くのものがエリートになろうとして、またはよりよい社会的地位を求めるがゆえに、上級学校に入学するための準備として、外国語教育・学習に関わり始めたことも事実ではなかろうか。つまり、外国語（英語）教育・学習が選別のための手段となり、それが低学年にまで及んで受験英語なるものを生み出してきたことをどう考えるかである。勿論、戦前から受験のための準備教育は存在していたが、その人数や規模において今日とは比較ならないものである。戦前よりも戦後の方が、外国語教育とエリートの関係がつよくなったのではなかろうか。しかも語学教育にとって不都合なことは、余裕なく学習するが故に、読み、書き、聴き、話すという四技能の面で、前二者に傾き、聞き話すは無視または軽視されてしまっている。この状況が続けば、比嘉氏の予測とは逆に日本語と英語の併用など全く期待できないのではなかろうか。「受験英語」の評価については、今後論じることにするが、ここでは「国際語併用国」になる可能性を困難にしているものとして考えられる。

次に、より根本的な問いになるが、図3のところで説明したように、左のまわる内円と右にまわる外周円というような逆流する星雲のような、遠心力と求心力の対立の中であって、外界からの情報を管理するゲート・キーパーが存在することを述べた。戦前の内務省とは比較にはならないであろうが、文教政策の担当者が日本が国際語併用国になることを望んでいないように思える。現在でもアメリカの大学設置基準協会が大学として認定したアメリカの日本分校は、日本の大学設置基準とは異なるものとして各種学校扱いであるし、中等教

育レベルのアメリカのインターナショナルスクールも同じ扱いを受けている。これは、英語が本当の意味で日本で使われた時、つまり翻訳や通訳ぬきで、いわゆる英語の論理が生徒や学生の中に身についた時、日本語の方が負けてしまうばかりか、日本文化が防衛できないという不安、危惧、恐怖が働いているように思える。これは、本音であるから、表面には出てこない。建前としては、英語で考えコミュニケーションすること、言語活動を重視することを提唱している。しかし、それを教える教師の条件として、外国留学何年以上という条件もないし、教師になってからの海外研修の条件整備もなされていない。その上、いわゆる「受験英語」でしぼっている。ここに、文教政策、言語政策を担当するものの現実がある。

これは外国語教育の目的が国際併用国になるということを批判しているのではなく、むしろ、「現在の状態が続けば、そのうちに日本は日本語と英語の二言語併用国になりうる」というのは少し楽観的ではないかと言いたいのである。

この日本の言語政策担当者の政策に関しては、このコラムの執筆者の中に二つの主張がある。一つは、1988年7月9日のユーハイム社長河本武氏のものでその箇所を引用する。

「フランスの作家ドーデの「最後の授業」に次のようなくだりがある。アメル先生は「ある民族が奴隷になっても、その国語を保っているかぎりはその牢獄のカギを握っているようなものだから、ドイツ軍に占領されても、フランス語をよく守って決して忘れてはならないことを話した」と。まことに的を射たもので、言語が文化や行動様式を支配するような気がする。」

もう一つは、1989年1月14日聘珍楼社長林康弘氏のものである。

「日本における英語教育は、多くの指摘があるように、基本的に翻訳的英語を教えている。これはエゴイスティックな態度だと思う。彼らと友達になるわけじゃない。意味さえわかればいい、という態度が見られるからだ。日本は外国の文化を容易に受け入れる国である。しかし真にことばを学ばなければ、正しい理解はできないと思う。」

この二つのことば、言葉、言語に関する観点は、二つの諺を想起させる。「ミ

イラ取りがミイラになる。」と「虎穴に入らずんば虎児を得ず。」であろうか。（後者は、未だ自己の、自国の利益というニュアンスが残っているが。）

この言語政策に関しては、他の諸外国の事例について研究する必要を強く感じるとともに、現在の外国人労働者流入という事態ともあわせ考えると、異文化の受容・拒絶・統合の新しい対応局面が立ち現われていると考えられるのでますます重要性がでてきていると考えられる。しかし、この章では、これ以上踏み込まずに、外国語教育の位置については比嘉論文で一応一つの総括を見たものとして先に進むことにする。

ただ、日本が西欧に追いつき、追いこす立場をこえて、また植民地化するという危惧と不安の時代が終っているこの現在において、いつまでも英語を日本の文化と日本人の行動様式を変えてしまうという理由で、百年前、欧米人を「出島」にのみ行動を許すというメンタリティーから自由になるべきであって、英語が私たちを欧米人のようにしてしまうと考えることは他の二ヶ国併用国をみても妥当ではないことは確かである。

第三章 言語と人間

このテーマは、様々な観点から論じられてきたことであるが、ここでは社会言語学的な観点から具体的に論を展開したい。現実の生きた社会にあって、言語はどのようなものとして受けとめられているのであろうか。

このことに関して、日本の二人の外務大臣松岡洋右と幣原喜重郎の外国語体験についてエピソードを聞いたことがある。御承知のとおり、松岡洋右は日独伊同盟をめぐって国際連盟を脱退した時の外務大臣であり、満鉄総裁にもなった人物であるが、青年時代にアメリカに留学した。欧米の世界について学び、アメリカで生活している中で「街頭英語」でアメリカ人とよく衝突したらしい。当時の帝国主義的、植民地主義的風潮の中で、日本人として、欧米の世界が白人優位（White Supremacy）の世界であり、日本人は黄色人種として軽んじられていることを身をもって経験したのであろう。いわば、ケンカの中で英語を学んだといえる。その時、「言葉は力である」こと、もう一步進めて、「力が言

葉を支えている」、「力は言葉である」ことを学んだといえる。

後に、外交官になった時、外国の外交官、政治家は彼の攻撃的な英語に辟易したといわれている。彼は、国力、軍事力、経済力こそが言葉であると信じていたがゆえに、人間の言葉を信じていなかったともいえるのである。外交官として、力を背景に完臂なく相手を攻撃威圧し、圧倒することが彼の交渉・外交術であったと考えられる。しかし、この外交が日本を何処に導いていたかは、歴史の知る通りである。

もう一人の外務大臣は、幣原喜重郎であり、戦後、総理大臣になった人物である。彼は英国に留学し、英国人のチューターから英語を学んだ。ある有名な政治家の演説を暗誦することを課題に与えられた時、日本人のよくやるように、丸暗記し、それをチューターの前で棒読みした。その時のコメントが彼の外交官としての方向を定めたといえる。チューターは、「政治家にとって、言葉は生命である。言論の自由の歴史は、人が言葉に生命をかけてきた歴史であって、政治家が一つの発言をする時には政治的生命を賭けている、いや生命すら賭けている。どうして政治家、外交官を志すあなたが、一人の政治家の演説の一語一語を大切に伝達しようとししないのか。」と問い、一つ一つの言葉、表現を大切に発音し、心をこめて語ることの大切さを論じたという。ここで、「言葉は、生命であり、自由への訴えであり、その人物そのものなのだ」という根本原理を教えたのである。それ以後、幣原は外交官としての言葉は、その人格において誠実に語られ、責任をもって守られねばならないものとして受けとめたのである。幣原は、戦争へ傾斜する時代の中にあっても、誠実に対話し、交渉する人物として、欧米の外交官、政治家から信頼され、誠実な人格として尊敬されたのである。

現実に生きた社会にあって、この二つの言語観は多くのものを示唆する。

ここから言語を見る二、三のモデルが構想できよう。マルクスの上部構造と下部構造の通俗的理解を援用してみると、明確になる。つまり、「存在が意識を決定する」のか、「意識が存在を決定する」のかといわれるように、松岡にとっては、社会的、経済的、政治的な存在こそが、ことば、イデオロギーを決定しまっている

のであって、言葉に信をおくことができないという立場をとっている。(図5)

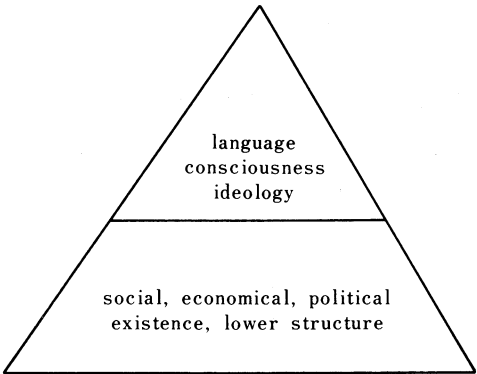


図5

この中では、人間も言葉も下部構造に操作されるものにすぎない。
しかし、このモデルには人間と言葉を十全に位置づけることができない。すべてが下部構造の中に収れんされ、下部構造から解釈されることが方向づけられている。

それに対して、言葉は、人間が他者と意思疎通するために、その多くの社会的、経済的、文化的障害にもかかわらず、誠実に伝達するものとして受けとめるものであるというモデルは、次のようになるであろう。(図6)

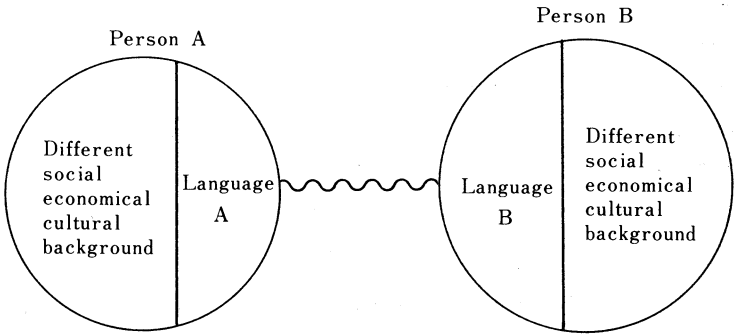


図6

ここでは、人間 A は人間 B とちがった社会的、経済的、文化的背景をもって相互に働きかけている存在ではあるが、より相手に理解してもらい、納得してもらうには誠実さ、誠意、尊敬が必要であるということになる。ここでは、人間と言葉がより統合されたものになることが目指されるし、その努力に尊敬と信頼がよせられるという構造になる。

次に、芸術家の人たちの外国語体験の中によく見られるものであるが、音楽、絵画その他あらゆる芸術が、人間の不完全な言葉を超えて、人間を芸術、作品をとうして普遍の世界へ人間を招きいれているという構造である。モデルとして次のようになる。（図 7）

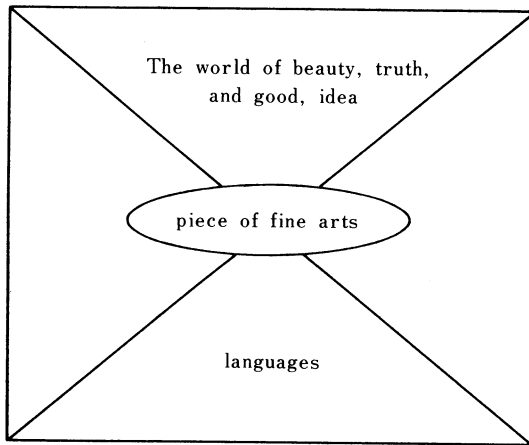


図 7

この普遍的イデアの世界がまずあって、その中に包まれている存在として人間があり、芸術作品をとうして、個々人の言葉は不完全・不十分であっても、その当事者間（芸術家同志、芸術家と観賞者）には意思の疎通が可能であるというモデルである。つまり、「芸術には国境はない」、「芸術家には言葉は要らないし、言葉では表現できない」という世界のモデルである。

これと全くよく似た構造を形成するのは、宗教、恋愛の世界である。宗教の場合、神が完全・万能・普遍・内在と受けとめられ、人間は、その中に包みこ

外国語教育の「バビロニア捕囚」からの解放（一）

まれている不完全な存在であると考え、人間の欠け、人間の力なさも、神の慈しみに覆われていると考えることができ、たとえば言葉は口から出てこずとも、神の愛への感謝に溢れているということも、構造上、モデル3に類似している。芸術作品のところに、教会、同朋愛、兄弟愛を置けばよい。

つまり、言語の空白、空所をうめるものは、宗教においては神の普遍的存在であり、芸術においては美的なものへの共通の労作の経験と慕れであり、様々な同志的結合にあっては、共通の体験であろう。

このように見る時、言葉は、唯物論的扱い、(異文化)コミュニケーション論的扱い、観念論的扱いを受けていることが理解できる。

この三つの立場で、ことばを定義すれば、「ことばは力である」いや「力はこのことばである」という第一の立場、「ことばは精神そのものである」という第二の立場、「ことばは不自由、不十分である」という第三の立場になるかもしれない。(図表8)

point of view	Important factors in discourse
Materialism	Power, things as such, ideology
Cross-cultural theory	Human beings with different culture
Idealism	Spirit, ideas, beauty, truth

図8

人間を動かすものとして、この第8表を参照しつつ考えると、競争・闘争・戦争といった権力への意志がまず浮んでくる。これとは全く対照的に、愛他的な原理、恋愛や宗教にもとづく他者への、また他者との共感、共鳴、協調の原理も考えられるであろう。ことばを学習する時にも、ことばを教える時にも、相手に訴え、また自分で納得する時にも、この二つの原理は深いところにひそんでいるといえる。

第四章 二つの知識—現実の外国語体験を受けとめるための予備理解として—

人が知識を得たいと思った時、まず知識のある人のところへ行行って学ぼうと

するであろう。そして、一般に、その知識は体系と秩序をもち、より広く、より高い視座から全体が展望できるもののほうが望ましい。しかし、この知識はその与えられた人に本当に受けとめられるようになるには、何が必要であろうか。この間は、言語教育を行う時にも、常に自問せねばならない間である。多くのことがあたりまえ、自明と思われているがゆえに、多くのことが問われないうまま残されている。そういった間の一つである。人が教える時、相手の人が学ぶということを達成するのに何が必要であろうか。つまり、 χ を教師が教えたと考えても、生徒・学生は本当に χ を学んだといえるのは何をもってであろうか。コミュニケーション理論の「非対象性」をも含んで、私と他者には差異が存在し、またこの差異こそが私を私とし、他者を他者たらしめているものであるとしたら、一体どのような状態になることが二者の間に了解・理解が達成したといえるのか。その時、知識はどのように受けとめられるべきか。

ここで、『イスラム修道僧の物語』の中の「知識はいかに得られたか」という話を紹介したい。

弟子が先生に「私は無知で、何の価値もない者です。先生の知識の一端でも与えていただければ幸いです。」と訴える。すると、先生は、「知識は、ただでは与えられない。私の先生の修行の助けとなるから、カーペットを手に入れてこい。そうすれば、知識を授けよう。」という。早速、弟子はカーペット屋に行き、カーペットをくれというが、カーペット屋は、糸をもってこいという。早速、事情を話して、糸をくれというが、糸屋は羊毛をもってこいという。そこで、羊飼いのところへ行き、羊毛をくれというと、羊を一匹もってくれば、羊毛をやるという。羊飼いのところへ行き、事情を話すと、「羊が夜よくいなくなるので、柵を作ってもってきたら、羊一頭をやる。」という。大工のところへ行ってこれまでの事情を話すが、大工は「それは私には関係がないし、関心もない。私は嫁を求めている。世話してくれたら、柵を作ってやろう。」という。弟子は途方にくれ、道を歩いていると、大工さんに嫁に行きたい女性についての情報・縁談話をもっている婦人に出会う。是非教えてほしいというと、その婦人は「人間は自分のことしか考えていない。私のことは聞いてくれないのか。」

という。弟子が何が欲しいのかというと、その婦人は「人生で様々な経験もし富もある。しかし私には知識がない。知識がほしい」という。弟子は、「知識をえるにはカーペットがいる」と説得するが、その婦人は、「私のような無学のもので、カーペットが知識とは思えない。」と言って、去ってしまう。ここで、すべての交換の関係が切れてしまう。この弟子は、人間がいかに自分の利益しか考えていないかを体験し、人間に絶望する。そして、彼は、「カーペット、知識。知識、修行のためのカーペット。」とつぶやきつつ、街をうろつく。すると、一人の商人が近寄ってきて、「修道僧さま、私はあなたの貴い生き方を尊敬しています。私には悩みがあり困っています。助けて下さい。」と申し出る。弟子は、自分の無力を知りつつも、何か手伝えるならと商人の家に行く。そこには、娘が病気でふせていたが、その娘の話を聞くと、恋の病いで、その相手は、弟子が先に柵を頼んだ大工であった。

そこで、大工のところへ娘を連れてゆき、大工は柵を作ってくれ、それをもっていくと羊飼いは羊をくれ、以下すべてがうまくゆき、カーペットを手に入れて先生のもとに戻れることになる。その時、先生は弟子に語る。

「あなたに知識を授けよう。今なら、おまえは学ぶことができるであろう。おまえは、自分だけのために知識を求めていたら、知識はえられなかったであろう。カーペットのために努力してきたから知識がえられるようになったのだ。」と

この話はいかに解釈されるべきであろうか。

この物語は二つの段落に大きく分かれている。前半では、次の諸点が示されているように思える。ふつう、「知識」は買ったり売ったりできる「もの」のように考え、また現実には「物」や「サービス」として交換されているが、つねに対価を支払うものとして扱われている。そして、交換においては、二人のひとが欲しいものが一致したとき、成立する。「物」や「サービス」の交換は、現代の社会では貨幣が媒体となるので、この事実は隠されている。そして、先生と弟子の最初の会話も「カーペット」と「知識」の交換のように一見みえるが、本意はそうではない。この「交換」の現実のサイクルが破綻するのは、弟子が婦人と「知識」について意見が一致しなくなった時である。

弟子の「知識」は、仏教でいう「学得底」であり、婦人の「知識」は「見得底」というものであろうか。カーペットと交換可能な知識とは、体系化され、秩序づけられ、より広く、より高い視座から全体が展望でき、その所有によって社会的に評価されるような知識である。もちろん、後者の婦人も、「見得底」に近いと言っても、ここで考えられているのは、依然、財産、地位と同様に所有できるものとしての「知識」である。このような知識は、交換も蓄積も可能であり、文章、図表で表現でき、説明できるものであって、マイケル・ポラニーの「陽表的知識」(explicit Knowledge) である。この婦人は、「私は様々な経験をし、この世で財も十分得てきた。しかし、知識というものがない。」と言う。ここであこがれ望まれているのは、個々の経験や情報を包括的に体系化し、理解することを可能とする知識であった。つまり、個人的経験を統合し、個人的経験を包括的に理解せしめる知識というべきものへの^{あこ}憧れへの萌芽が見られるのであるが、現在の弟子の理解のレベルでは答えることができない。

彼は、人間が自己の利害得失から行動するものであり、自己の立場しか考えないことを知り、人間への絶望に陥いる。交換価値のみを需給のバランスの中に求める商人のように、社会に振りまわされ、自己に振りまわされる孤独の世界を経験したことであろう。自分のためにだけ「知識」を求めてきたこれまでの生き方にも反省が及んだかも知れない。そして、徐々に「カーペット」のことだけを考えはじめる。

彼は一つのことには心を集中し、「修行を先生がすすめられるためにカーペットが要る。カーペット。修行のため。」をお経を唱えるように、つぶやきつつ街を通っていく。

話の後半は、恋の病で悩む娘をもって困っている商人に声をかけられることから新しい人間関係が再開する。「スーフィーの人々は社会で特別な働きをされる人々です。どうか助けて下さい。」と言われる。弟子は「私は自分自身が困窮し、何も持っていません。必要な糸すら得られない人間ですが、できるだけのことをしましょう。」と答える。そして、娘の恋人が実は、弟子が柵を作ってくれと頼んだ大工であることが分かる。そして、大工は嫁を見出し、そのお

礼に柵を作り、柵のお礼に羊飼いは羊をくれ、羊のお礼にと羊毛をもらい、ついにカーペット屋からカーペットの手にいれ、先生のところへカーペットをもって行くことができた。

すると、先生は、弟子に「もし自分のためだけに知識を求めていたら、知識はえられなかったであろう。カーペットのために努力したから、知識がえられるようになった。だから、今、私は君に知識を与えることができる。」というのである。

ここで、話の前半と後半を対比してみると知識の存在が、その構造が見えてくる。自己のために、利害関係の「ギブ・アンド・テイク」の中にある知識を真剣に求めていた時には、人間の利害関係の中であってその壁の中を巡り歩くことになり、「知識」はその人の等身大の大きさを越ええなかったし、その社会の中に「閉された知識」であったし、彼はその人間関係に絶望することになる。

しかし、後半では、商人の悩みの訴えにこたえて「彼自身」のためではなく、他者のために働こうとした時、これまでの「知識」を求めて歩きまわった経験は、再び社会についての知識としてその存在価値を持ってくる。そして「経験」が「知識」として、社会についてのこの個人的知識が生かされてくる。ここで知識は、先に彼が求めていた「陽表的知識」(explicit Knowledge)とは全く異なる「暗黙的知識」(implicit Knowledge)なのである。

この知識は、コルジブスキーの『一般意味論』の中に例示される、地図と領域 (map and territory) の関連で受けとめることもできよう。地図は、先人の踏査、視察、測量によって開発され、蓄積された経験や情報が体系化され、陽表的に明示されたものである。その地域の知識を「外に」持ち、現場と対比しつつ人間に方向づけを与える (orientate) という有利さを持つ。しかし、現在の状況は、時々刻々に変化しているものであるがゆえに、その地を旅するとき、必ずしも地図のとおりでない。この時、この地で経験を重ねているものが時々刻々えている領域についての暗黙的知識が重要性をもってくる。

この弟子は、「知識」を「地図」として得ようとしていたし、また幾らかはもっていたであろう。しかし、もっと大切なのは、「地図」を「領域」としてつね

に受けとめなおすことができるかということである。

また、マイケル・ボラニーは、ネズミを迷路にいた時と、人間を迷路にいた時を対比し、迷路は両者にとって先に述べた「暗黙的知識」の創発を求める経験としている。

つまり、私たちが一つの不明確な状況に投げ入れられ、不明確な対象と遭遇した時、必要なのは一つの手がかりに焦点を合わせて、その状況を切り抜けていく力なのである。ボラニーは定焦点的感知（focal awareness）といている。これは、ゲシュタルト心理学の前景（foreground）と後景（background）と関連している。一つのものに焦点をあわせると、他のものは補足的感知（subsidiary awareness）となる。人間がこの定焦点的感知をとぎすまず時、個々の事項・事象が見えてくると同時に全体像が見えてくる。

しかし、ボラニーが越えようとしているのは、ゲシュタルト心理学が公理として「部分の総和は全体ではない」ということを、一つの陽表的知識として止め、ここに止まることなく、個々人によって定焦的感知の合わせ方が異っていることにより、個々人は異った全体像をえているという「個人的知識」の存在を最も重視するということである。科学的普遍的真理という全体を最高のものとして固定するのではなく、個々人が全責任を引き受けて全体像を形成し、より高い次元に昇っていくプロセスを前進的・積極的に評価することにある。

この時、各個人はその十全な意味で、歴史的、社会的、道徳的、美的責任になうものとして位置づけられてくるという立場をボラニーは説く。これまでの科学的真理がともすれば、全体を部分より優越するものとして、各個人を切り捨ててきたことを批判する。そして、各個人たる部分が全体への責任的存在として十全に位置づけられる時、科学はまた動的に前進しうると主張する。

この視座に立った時、「陽表的知識」と「暗黙的知識」をつねに見極めつつ、単に理解にとどまるのではなく、包括的理解、納得という方向にこの小論を方向づけていくことができると考える。

第4章 教えることと学ぶこと

同じ『イスラム修道僧の物語』の中に「火の話」という短編がある。

昔、火をおこすことを発見したノウルという人物が様々な村や部族にその知識を伝えた。

幾世紀がすぎ、第一の部族は、その知識と技術を僧侶が独占し、富と権力を享受していた。第二の部族は、火をおこす道具を崇拝していた。第三の部族は、ノウルの肖像を崇拝していた。第四の部族は、ノウルと火の伝説を語り継ぎ、ある者は信じ、ある者は批判していた。第五の部族は、実際に火をおこし、暖をとり、料理をし、有用な道具を作り出し、その知識と技術を用いて文化を形成していた。

この五つの部族を旅していた先生と弟子たちは、この様々な生活様式を見聞し、この部族の守っている儀式がすべて火をおこすことと関わり、火というものの概念を改め直させる必要を弟子たちは感じた。そこで、先生は「再び旅に出よう。最後まで生き残ったものが現実の問題をどのように解決すべきかを知るであろう。」と謎めいた言葉を語る。

各々の部族に対して、弟子たちが本人の責任のもとに火の本質について語り、火の知識と技術を教えようとする。

第一の部族のところで、火の儀式が行われ、その興奮さめやらぬ時に、第一の弟子が語る。「君たちが奇跡だといっているものを私は簡単に行える。もしその奇跡を私が行えば、これまでの積年の誤まちを改めるか。」すると、僧侶たちは彼を捕らえ、連行して彼は二度と帰ってこなかった。

第二の部族のところで、第二の弟子が進み出て、「諸君は、火そのものではなく、手段である道具を崇拝している。火は有用なもので、この儀式の根本にあるのは、火を利用することである。」と語ると、村人や僧侶は「君は、村の歴史と慣習を知らない他者であって、私たちの行っていることを理解していない。私たちの宗教を変えようとしているゆえに、聞く耳を持たない。」と拒絶した。

第三の部族のところで、第三の弟子が、「この肖像画の人物は、火をおこす能

力をもった人物で、この火は利用されるべきである。」と語ると、村人は「奥儀は少数者にしか知らされておらず、君の発言はとんでもない異端の言葉であって、私たちの言葉も話せず、僧侶の資格もない人間からそのようなことは聞きたくない。」と拒否した。

第四の部族は、少し理性的であったが、第四の弟子が「火をおこす話は真実であって、私が火をおこしてみせよう。」と語ると、部族の中に多くの分派が生じ、混乱が起った。この論争好きの部族は、「私たちはこの伝説をそのまま受けとることが望ましい。この部族の絆となっているものであって、新しい解釈を受けいれると私たちの部族はどうなるのか。」と結論づけた。

第五の部族も、火をおこすことは日常茶飯事であったが、色々の偏見があった。

この体験を終えて、先生の語るところを聞いてみよう。

「諸君は、いかに教えるかを学ばねばならない。なぜならば人は教えられることを望まないからである。そのため、まず学び方を人に教えねばならない。しかし、その前に、人に学ばねばならないことがまだあることを教えねばならない。人は学ぶ態勢ができていと想像している。しかし、人が学びたいものは、ひとが学ばねばならないと心に想定しているものであって、決して彼が第一に学ばねばならないものではない。諸君は、これらのことをすべて学んだ後に、はじめて教える時の工夫ができるのである。教えるという特別な技能をとまなわぬ知識は、知識や技能として伝達されないのである。」

ここで語られていることを整理すると、教えるものの困難さと学ぶものの困難さに二分されよう。

学ぶもの、教えるものをこえて人間はまず人に教えられることを望まない存在であることが語られている。これは集団においては、伝統・伝承・慣習・慣行・宗教・学問における硬直性であろうし、個人においては他人に主導権を握られることへの嫌悪であろう。集団・個人に関わらず、教えること、知識を伝えることにはこのような心理的力学が作用している。

そこで教えるものの困難は、人にまずまだ学ばねばならないもの、知らなけ

ればならないものが存在していることを教えることによって、最初の糸口がつけられる。しかし、学ぶものの困難は、自分は学ぶ気持ちがあり、その態勢になっていると想像していることからくる。つまり、学びたいと思っていることを学びたいのであって、自己の枠から抜けでられない存在であることからくる。それに対して教えるものの困難は、その枠を根本から揺り動かして、まず第一に学ぶべきことを教えることからくるといえる。

「教えられることを人は望まない」というこの性向を考慮に入れて、学ぶことを教えるにはどうすればよいのであろうか。その一つの方法は、佐伯胖氏が『学びの構造』の中で述べているように、「～すべきことを教えること」（*能・規則*など *teaching to*）、「～する方法を教えること」（*技能・技術*など *teaching how to*）、「～ということを教えること」（*命題を展開する teaching that*）の三つに対応して、「行うこと」「できること」「分かる・理解する」が学ぶ側に問題として与えられる。この三つは、次の図式に示されよう（図表9）

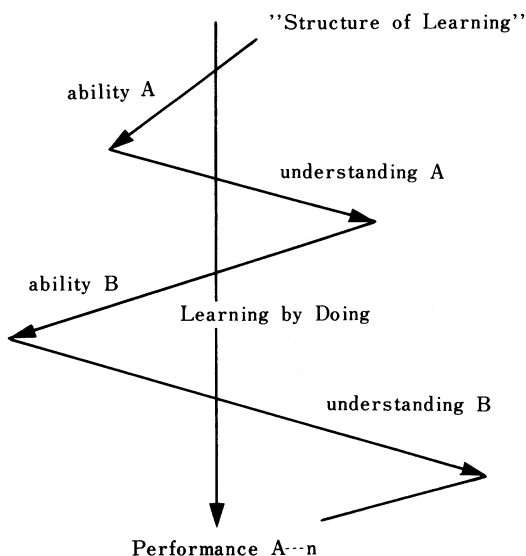


図 9

この図式を「できる－わかる」のジグザグ行動と呼び、実はこの2つが動力

となって「行う」(performance) が可能となっている構造であり、人間がこの学びの構造にはいるには、目的が明確であることが望ましいことであるが、この目的はつねにオープン・エンドのものと考えられる。

人がある目的にむかってやってみようとする時、教える者に対する信頼、委任する気持ちが大切であり、そして学ぶ者はやろうとする決心・決意が必要となり、目的にむかってやり続ける忍耐力・持続力が求められることは自明のことである。

この学びの構造に、人がはいれば、あとは「できる－わかる」のジグザグ行動を自らの力で進めていくであろう。その時、人は自ら学ぶのであって、教えられているとは考えない。デューイの教師の役割の定義にあるように、教師は、教育環境を教材と目的とともに二重に操作する存在としてその立場を発見するのである。

以上、「外国語教育の位置」「言語と人間」「二つの知識」「教えることと学ぶこと」の中で取り上げた視座の中で、「私の外国語体験」の記事をケース・スタディとして考察していくことにする。

第五章 「学びの構造」

－ケース・スタディー (その1) 89. 6. 24 記事

国際交流基金常務理事 光田明正

文化の違いを踏まえて「こころ」を理解する

友人によると、私が外国からの来客と、英語や中国語で話していると、いかにも楽し気で、笑いが途切れないう見受けられるそうである。(第1段落)

よく何ヵ国語ができるのかと聞かれることがある。仕事の上でイメージアップになると考え、4、5ヵ国語はできると答えることが多いが、どの言葉をとっても、奥行きが深く、とてもきわめつくせるものではないと思っているのが本音である。(第2段落)

●遠まわしの「NON」

もう 10 余年前のこと、パリ郊外の森に囲まれたビル・ダブレーという住宅地に住んでいたところである。アパート敷地内にあるコートでテニスをした後、ボールを数えると一つ足りない。隣のコートに転がっているのが私たちの物のように見えた。そこで「私の物ですか」と聞くと、その隣人は「Je ne sais pas」。訳せば「知らない」ということであるから、走りより拾おうとしたところ、一緒にいた前田さんが、「彼らの物ということよ」と言う。けげんに思いながらも拾うのをやめたら、そのフランスの隣人は、ニコッと笑いウインクを返してきた。それは、「non」の遠まわしの表現であったのである。（第 3 段落）

Je ne sais pas という簡単なセンテンスの直訳は知っていても、そのころを私は理解し得なかったのである。前田さんは、現在は婦人教育会館の館長であるが、フランス語のころを把握していたのである。（第 4 段落）

同じ時期、直訳すれば「領収書が事務室にあるから受け取りに来て下さい」という手紙が家主から来た。しかし、その月の家賃を払った覚えがない。フランス人の秘書に、何かの間違いではないか調べてくれと言うと、事務室に行けばよいのだと言う。「家賃を事務室に持って来たら領収書を渡す」というところが、その文章にあったのを知ったのは、後のことである。（第 5 段落）

今では、どこの大学にも中国からの留学生の姿が見られるが、中国政府が 1978 年に、留学生を大量に派遣したいと申し入れて来た時は、大変な騒ぎであった。当初、中国側の提案は、500 人派遣であったり、2,000 人であったり、10,000 人であったり、それが責任ある人の発言として様々に伝えてくる。500 と 10,000 とでは大分違う。（第 6 段落）

きまじめな日本の当事者には困惑し、イライラを隠し切れない人も出る始末。その時、名古屋大の石塚学長から、いちいち人数など直訳する必要はない、沢山ということに過ぎないこともある、また 10 億の人口を抱える

中国の人にとって500と10、000の差は小さいものであることも念頭におきなさい、という助言があった。石塚学長は中国語は話されないが、中国で医療に従事したことがあり、中国を知っていたのである。その助言が話し合いの進展にどれだけ役立ったことか。（第7段落）

私は、中学から高校にかけ、台北で中国語を勉強した一時期がある。日常会話では全く不自由しない。しかし、私の中国語は、そのような場面では少ししか役に立たなかったのである。（第8段落）

●日本語と異なる構成必要

もう一つ、外国語については、26歳のころ、カナダに1年間学んだ時のことを思い出す。政治学などの一般的な学問ではさほど困難を感じなかったが、カナダの経済というセミナーでは、最後まで討議に加われなかった。カナダの地理など背景にある事実を知らないからである。（第9段落）

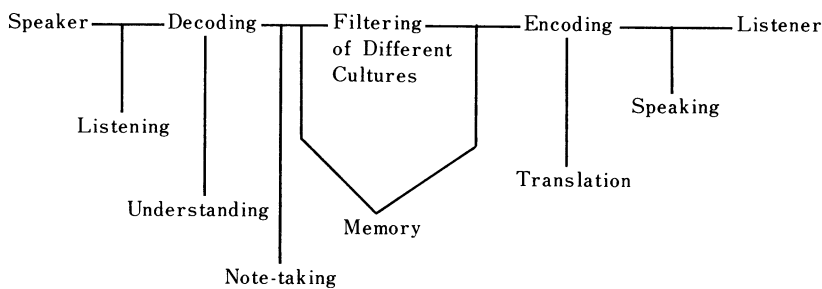
さらに忘れたいのは、最初に長文の論文を一生懸命に作成し、提出した時の教授とのやりとりである。何を言わんとしているのか分からないとの評。英語に間違いでも多いのかと反問すると、correct Englishを書くのは当然のことで、good English でなければいけないのこと。その時、英米的起承転結について学び、それ以来、英語で書く際は、日本語で書く時と異なる構成で書くことが習性になっている。（第10段落）

いかにすれば相手に話や文章を理解してもらえるか、文化の違いを超えて説得的になり得るか、国際交流基金に在任する現在も、日々研さんに努めているところである。（第11段落）

第一段落では、友人の視点から、二ヶ国語を自由に流暢に話し、ジョークやユーモアに富んだ会話がなされていると報告されている。たしかに、上品なユーモアは分析不可能であり、ひとの共感を呼び、ある親しみが感じられ、身につまされる思いがし、自分がある面で笑いの種にしつつ、同時に相手にもその立場では似た行動をすることを納得させる力がある。このことは、ある言語とそれを用いる社会とその文化に精通し、それを使う人々の人間関係の機微を通

暁していることが背景にある。その意味で会話が楽しく笑いが途切れないということは、その会話者の人格によるところが多いが、そのための努力としてその相手の国の言語のみならず、文化・習慣・現実の社会を知っていなければならない。これはまさに異文化コミュニケーションの実戦モデルである。(図6参照)

その図6をより正確に図式化したものが、異文化コミュニケーションの通訳者のモデルである。(図10)



(Kume, 1986)

図10 Process of Interpretation

ここで注目すべきは、光田氏の場合は通訳者の役割を自ら行い、ユーモアをまじえてであるが、中央部の異文化のフィルターの部分である。ここに大切な要素としてどのようなものがあるかが、文化の違いを踏まえてと題されているように、テーマである。婉曲表現であり、逆に誇大表現であり、大きな文脈での知識であったり、社会的、経済的、地理学的知識であったり、英米的起承転結などの文章構成法、レトリックなどである。

第二段落では、筆者の国際交流基金常務理事という立場にあって、必要な多くの外国語が運用できると明言されている。たしかに、フランス語などの実例から分かるように、ラテン系の言語もカバーされているのであろう。しかし、本音としては、「どの言葉も奥行きが深く、とてもきわめつくせるものではない。」と語られている。

これは、第三～第五段落のフランス語、第6段落～第8段落の中国語、第9

段落～第 10 段落の英語の実例によって、「直訳」では分からない「ところ」のあり方が示されていることで分かる。言語的、しかも直訳的な表現の背景にある文化的、社会的、地理的な「知識」がいかに大切であるかを力説しておられる。「語学ができればできる程、その背景をなす各種の知識の大切さが分かる。」つまり、「できればできる程、理解しなくてはならないものが増える」といえる。その点で、「学習のジグザグ行動」（図 9 参照）を進んでおられる。

テニス・コートでのボールと家主からの領収書の話に示されている一種の失敗例は、実は私たちが努力する限り続く誤ちであろう。これは次のように分析できよう。「できる」という線上で能力が向上していく時、次の次元へと高まりをみせる時には、それが前次元で正しかったようには通用せず「誤り」ということがわかってくるという「学習の構造」がある。たとえば、幼児の言語習得の例で、当初大人の模倣として、I come、I came、I go、I went と言っていたのが、過去形の生成規則は V + ed ということを知った時、その時点で I comed、I goed、という誤りをおかすことがある。ここでは「できる」がある地点、時点まで進み、一つの失敗を招来した時、次の次元においては「わからないーわかる」が出現する。この例では、規則動詞と不規則動詞の分類ができるようになって、再び混乱が収まる。これは現実の社会においては、組織体全体の危機な場面を招来することになる。

その例として中国人の留学生の派遣数に関して、500、2000、10000 と色々と情報が混乱し、対応に苦慮した例がある。中国を知っていた名大の石塚学長は、10 億の人口の中国の人々にとってこの差は問題ではないと助言される。この筆者は中国語で日常会話はできたのであるが、この場面では少ししか役立たなかったと言う。「できる」ということがある時点で停止し、「わからない」という事態が招来し、その危機的状況を救ったのは、中国を知っていること、言葉の背景にある事実に関する知識であった。

第 10 段落で、長文の英語の論文を提出した時、何を言わんとするのか分からないと評された例である。一文一文は正確な英文であっても、論旨の通る文章となっていないというものであるが、これも「できるーわかる」のジグザグ行

動を示している。その言葉は、単語、文法の文のレベルではできても、パラグラフ構成法を知らなかったゆえに、その言葉で論旨の通る文が書けなかったということを示している。

このように、つねに外国語の力をつけようとする筆者は、第11段落で傾聴すべき結論を語っている。

「いかにすれば相手に話や文章を理解してもらえるか、文化の違いを超えて説得的になり得るか、国際交流基金に在任する現在も日々研さんに務めているところである。」

ここで大切な点は、相手である様々な文化的、社会的背景をもった人々に理解をえることに努力しておられる点である。上述したように、交渉や交流の中で様々な誤解、失敗をし、危機的な局面に陥った体験を背景とし相手も同じくそのような陥穽におちいる可能性をもった存在として受けとめておられる。ここにユーモアのでてくる素地、姿勢が感じられる。同一言語の共同体内でのコミュニケーションでも誤解が存在する。他の言語・文化の共同体の人々とのコミュニケーションにはより多くの困難が伴う。ここでは、情報の伝達という平面的、対称的な伝達のレベルをこえて、相手が納得するということは、より立体的で多面的で非対称的な伝達である。「頭では分かるが納得いかない。」という言葉に示されるように、理性・頭では理解できても、心では腑に落ちない、胸につかえるという現実に直面している。

相手に理解を求めるに止まらず、納得して積極的協力、アクションを起こしてもらうにはどうすればよいか。このためには、筆者の言葉では「こころ」が大切であり、マイケル・ボラニーの「陽評的知識」のレベルよりも深い「暗黙的知識」が必要であって、この後者の知識を得るには、「定焦点感知」をテコに、ますます深く「個人的知識」の獲得が必要であろう。ここでは、筆者はすべての努力を描出してはおられないが、日々研さんしておられることは良く分かる。ゲーテの言葉がその姿勢をまとめてくれると思われる。

「人は努力するかぎり誤りをおかすものである。」

第六章 未知との遭遇

ーケース・スタディー(その2) 1988. 6. 25 記事

厚生省援護局 援護課長 船橋光俊

広く浅く言語を学び外国人との交流円滑に

たとえ初歩的な水準でも幾つかの外国語の知識があることで、私の生活はより豊かに刺激的になり、仕事も楽しいものになっている。中国語や韓国語はこの1～2年独学中で、辞書を片手にボツボツ読む程度だが、それでも何度か役立った体験が、私の学習を促すバネになっている。(第1段落)

例えば、いま話題の中国産「101 毛髪再生藤」。中国の制度はよく分からないが、実はこの製品、中国衛生部薬政管理局も薬品としての生産申請をまだ受けつけていないものだという。同局からその第一報が届いた時、「作為薬品」(薬品として)「也沒見到任何有関的資料」(いかなる関係資料をみたこともない)といった文書の解説に、当時薬務局にいた私のおぼつかない中国語がそれなりに役立ったものである。(第2段落)

●異国暮らしで呼吸つかむ

外国語への本格的なかわりは役所に勤めた数年後にドイツのゲーテ・インスティテュートでドイツ語を8週間学ぶ機会を得て以来のこと。ドイツでの生活と同校の授業から得られたものは大きい。その成果の程はおくとしても、外国語を恐れずに話せるようになった。異国での暮らしが、受験英語でしみ付いていた正確・高度な外国語を話し損なう失敗への恐れをいやでもぬぐい去ってしまった。そして、知らず知らず聴く耳が養われ、ヨーロッパ系言語の強弱の呼吸がかなり体得できた。英語をほとんど使わずに帰国後、FEN で何気なく聴いた英語のヒヤリングの力が向上しているのに我ながら驚いたものである。(第3段落)

この体験を経て、私なりの実務的かつ趣味的な外国語への姿勢が定まってきた。第1に、英語の上達はあきらめ、かわりに様々な外国語を手がけることにしたのである。他の言語に比べ、英語にはつづりと発音の著しい隔たり、複雑な慣用句があり、その習熟には気が遠くなるほどである。とすれば英語の水準を80点から90点（50点から60点）に引き上げる努力よりも、広く浅く複数の言語の初歩を学ぶ（水準0点から50点）方が費用対効果の点で優れていといえるのではないか。（第4段落）

第2に学習目標。流ちょうな日常会話はできなくても専門のことがらについて確かな意思疎通さえできればよい。どの言語も日常会話ほど固有語が多く難しいのに対し、専門用語は社会の諸制度に関連してかなり共通語（借用語）が多い。problem（英）、Problem（独）、問題（日）、問題（中）、문제（韓）のように。それ故、こと専門分野のないように限れば、中学英語以下の文法程度で十分相互理解が可能なのである。（第5段落）

●外国放送がナマの教材

第3に聴くことを重視する。しかし、放送語学講座は入門用には悪くないが、教材に一般的内容が多いのでどうしても長続きしない。興味の持てるナマの代表的教材は時事問題なので、FENのほか、短波のドイツ海外放送、長波のモスクワ放送などで主にニュースや天気情報を聴く。分からない部分は気にせず知っている言葉を確認する気持ちで臨むことにしている。（第6段落）

さて、私にとって外国語を学ぶ意義とは多少なりとも外国人との円滑な交流に資することである。国際会議では、可能ならば正確さのために日本語を使う。その際、相手国語の知識があればあるだけ、専門内容について通訳し易い言葉遣いを心掛けられる。全面的に通訳に依存する場合よりも相互理解の上で摩擦は少ないようである。さらに、世界の動向、多様な文化について多面的な情報に直接、即時に触れられることである。この観点から、国際公用語であるアラビア語の放送語学講座が開設されることを望んでいる。（第7段落）

この筆者の論の展開は、基本的に語学の修得を肯定的、積極的に受けとめるものである。「幾つかの外国語の知識があることで、私の生活はより豊かに刺激的となり、仕事も楽しいものになっている。」外国語の知識が増え、外国語の数が増えれば増える程、その有用性のゆえに学習がますます進むという。たしかに成功・達成感は学習意欲を引き起こす大事な要素である。そして役に立つ、有用であることは、学習の努力に対する大きな報酬であることはまちがいが無い。その例として第2段落で、中国製養毛剤のことが挙げられている。だがと少し批判的にコメントしたくなる気持ちになるのはどうしてであろうか。それは後で分ってくるのであるが、第4段落のところにある基本的姿勢に関わってくると考えられる。語学修習の努力・費用とその効果・効用を対比して、一ヶ国語を習熟するために努力し、(80点を90点にあげるより、広く浅く複数の言語の初歩を学ぶ(0点を50点にあげる)方が優れているという効率主義に原因があるように思われる。

ここで想起するのは、人が未知に向って努力する時、同量の努力をしても全く異った体験をしているという事実である。(図11、12)

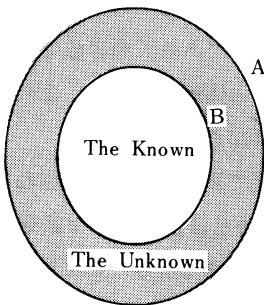


図11

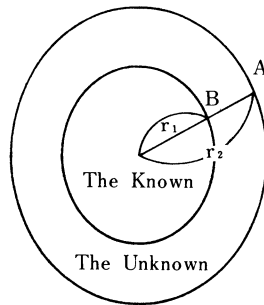


図12

このモデルで示しているのは、外円 A と内円 B の同心円であって、図 11 と 12 とともに外円 A と内円 B の間にあるものを未知のもの、事柄とし、内円 B は既知のもの、事柄とする。第 11 図では、黒くなった場所がいわば未知で学ばねばならないものと考えられる。効率主義とは、この未知のものをいかに速く、努

力に対して最大の報酬を得つつ努力するかが主たる課題となる。たしかに既知が増加すればする程、未知の部分は減少する。そしてその獲得した情報から得られるもの、有用性は十分に期待できるであろう。この筆者がそうだと断定することはゆきすぎと思われるが、第7段落のところで、「私にとって外国語を学ぶ意義は、多少なりとも外国人との円滑な交流に資することである。国際会議では正確さのために日本語を使う。」と語っておられるように、内心円の方には、日本語という正確な言語が存在しているようであり、外心円の方は外国語といった一つの枠組みが考えられている。このアプローチは、少しく量的または合理的な色彩の強いものであることが感じられよう。それ故、学べば学ぶ程、未知が減少するという合理的思考に通じるものであり、啓蒙主義的アプローチである。

では、もう一つのこの同心円の見方は、内心円の既知が増えれば増える程、実は未知と触れている内心円Bの円周は長くなる。つまり、既知が増える程、未知、知らないことがますます増えていくという体験をすることである。これは量的なアプローチではなく、質的なアプローチであり、先のケース・スタディ（その1）の筆者のように「できるーできない」「わかるーわからない」のジグザグ行動を含んだ学びの構造を含みこんでいるのである。その点で、外国語という未知の多いものと接触する時、二つの種類の体験のしかた、また記述のしかたがあるということを知っておくことは大事なことである。

第3段落以下では、受験英語で身につけた正確で高度な内容と話さねばならないというプレッシャーや失敗への不安が、英語とは別のドイツ語を話すこと、しかも日常生活の会話をするという気安さから消え去ったことが語られている。ここでテストされるという緊張から解放されることによって、リラックスすることができ、聴く耳が養われるという体験をしたということが語られている。強い自己防衛意識、正確かどうかという恐れ、不安から、暮らしの中で解放されることは、なかなか努力しても日本ではむずかしいことである。全身に力がいってしまって全ての単語を聞きとろうとすると、かえって意味がとれなくなる。リラックスして、少々のは捨てて重要なキー・ワードにのみ、

つまり強く発音されるもののみに注意していると、かえって全体の意味が浮き上ってくる。実際、母国語である日本語の場合、取捨選択して情報を取り入れているのである。

しかし、ここで筆者は、ヒアリングという分野に力を入れることに方向を変更してゆき、英語の上達をあきらめ、他の言語にシフトしていくことになる。（第4段落）しかし、実はヒアリングに関しては、次の三つの仮説があるのであるが、筆者は先述した合理主義と第1の未知へのアプローチを取る決定をする。

三つの仮説とは、ラドー（1954）のように、読み、書き、話し、聞く（図13ではR、W、S、Lで示す）を個別の技能分野と考え、各々を独立に教え、学ぶことができると考えるものである。第二は、この四技能は分割不可能と考え、総合的に教え、学ぶべきだとする。第三は友友（1981）が、その四技能は、部分的にオーバー・ラップしており、その相互関係は強いと考える立場である。（図13）

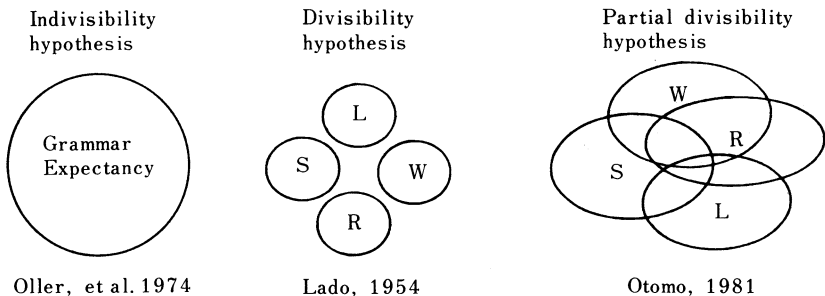


図13

この四技能に対して、どの仮説に立つかによって学習方法や姿勢も変わってくると考えられる。そこで筆者は、四技能分割可能説に立って、聞く、話すに重点を移動する。それは外国生活経験に基づいた学習方法を工夫されている。それは、流ちょうさよりも専門について意思疎通ができればよいという目標を設定し、外国放送で時事問題を聞きとる訓練を行い、ここでもリラックスして大意をとることに主眼を置く。余裕をもって楽しくやるから長続きもするとい

うことになる。筆者の関心を持つ言語は、英語、独語、ロシア語、中国語、韓国語と幅広い。しかし、ケース・スタディ（その一）の光田氏とは以上述べてきたようにスタンスが全く違うのである。

それを感じさせるのは、筆者の文中に、現在の言語へのアプローチに対しても、自己の存在への欠如感を示す表現が殆どないことからくる。そして、最後には、国際公用語であるアラビア語も学習したいと結んでおられる。意欲的、肯定的、積極的なのである。

この筆者は、「国際会議では、可能ならば正確さのために日本語を使う。」と明言し、自己の立場を明確にしておられる。この筆者は、文章から判断する限り、目的、立場ともに正確におさえ、合理的に行動される、ソツのない能吏であるというイメージが強く浮き上がってくる。

第七章 忘却との闘い

ーケース・スタディー（その3） 1990. 4. 21 記事

ソニートレーディング

社長室技術顧問

坂東克浩

長期出張で現地特訓 難しい語学力の維持

今年も「管理職リポート」の記入の時期が来た。私の勤務先では毎年4月になると、経験した職務とか製品分野とか、教育研修の希望とかを記入する。（第1段落）

その中に「外国語能力」の欄がある。そこに私は毎年ちゅうちょすることなく「英語」「スペイン語」「中国語」の3ヵ国語を記入することになっている。ソニーに入社して30年、いずれもテレビ製造技術者として業務の上で、必要に迫られ練習したものだが、日常会話はもちろんテレビ技術に関する会話のレベルはまあまあと言える程度まで訓練は重ねてきたつもりだ。（第2段落）

●“草分け”の苦労味わう

3つの言葉の中でも、当然だが最初は英語。入社したてのころ、当時、東京・品川にあったソニーのテレビ工場に來た欧州の実習生を相手に、豆単片手に必死に覚えた。当時は技術用語辞書などはない。部品の実物を見せたり、思いつく限りの単語を並べて説明したりと、“草分け”の苦労を味わったのを覚えている。（第3段落）

次がスペイン語。1968年にスペインのバルセロナに出張した。テレビの製造技術を移転、現地法人で生産するためで半年間の長期出張だった。出張が決まるとすぐ池袋にあったスペイン語教室に週3回（1回2時間）のペースで、4ヶ月間通い、文法を中心に、みっちり仕込んでもらった。少くとも現地に向くまではいく分かの自信はあった。（第4段落）

ところが、である。習熟したはずの言葉がまるっきり通じない。宿泊していたホテルの主人は英語が出来たが、工場に行くと周囲はスペイン語ばかりで何を話しているのか、さっぱり分からない。ホテルのボーイ相手に発音の練習に励んだが、なかなか理解出来るまでにはいかない。（第5段落）

そこで一念発起、バルセロナ市内にあったスペイン語の夜学に通い始めた。スペインの夕食は午後9時ころにならないとレストランが開かない。工場を終えてすぐ教室へ行き毎日1時間、スペイン人教師について訓練、その後、夕食というパターンだったが、1ヵ月もたたないうちに工場の仲間とも会話が出来るまでになった。もちろん真剣に学んだつもりだが、同時に周囲がスペイン語だらけという中での差し迫った必要性も、上達の理由だろう。（第6段落）

中国語は1971年から台湾に3年間の長期出張期間中に習得した。出張先はやはりテレビの製造工場で、副工場長として赴任。工場長が日本語を話せたため日本語でも仕事は出来たが、彼がいなくなると、お茶ひとつ頼めない。これでは不便だと、また勉強を始めた。（第7段落）

都合のよいことに下宿先のおばさんの妹が師範大学の学生で、彼女につ

いて週3回計4時間半のレッスンを積んだ。教科書は小学校1年生の国語の本。1年間でようやく話せるまでに上達、帰国時には工場の人全員の前で中国語でスピーチが出来た。ただ、これには後日談がある。発音だ。共通語のつもりで勉強したが、台湾のなまりがある。その後、中国に出張する機会があり、3ヵ月間ほど本場の中国語を学び、ようやく中国の人たちと話しても通じるようになった。（第8段落）

●出勤途中にもラジオ

学校にも通い、かなり努力して語学をマスターしたつもりだが、言葉は使わないとすぐ忘れる。日常的に使う英語や、今も仕事で行くためしばしば使う中国語はいいが、スペイン語はとんとごぶさたで、語学力は落ちる。バルセロナから帰って十数年ぶりにスペイン出張の機会があったが、その折、会議の席で聞いたスペイン語は、すんなりとは頭の中に入って来なかったし、最初のうちはこちらの言葉も理解されなかった。（第9段落）

常に親しんでいないと、言葉はすぐに口からは出にくいものだ。だから、せっかく習った会話能力を維持するため、朝の出勤途上、ポケットラジオを懐にしおぼせて「聞く力」の鍛練を欠かさないようにしている。スペイン語、中国語は自宅近くの研究会にも通っている。なじむこと。これしか語学力維持の道はないようだ。（第10段落）

第2段落で筆者の立場と状況が語られる。

「ソニーに入社して30年、いずれもテレビ製造技術者として業務の上で、必要に迫られ練習したものだが、日常会話はもちろんテレビ技術に関する会話のレベルはまあまあと言える程度まで訓練を重ねてきたつもりだ。」

比嘉氏の言葉で言うと、この人の外国語学習の目的や動機、状況ははっきりしていた。そのため、外国語教育（学習）も具体的になり得たし、その実用的効果も明らかであった。

第3段落から第8段落までに示される例は、すべて必要に迫られ、テレビ製造技術の指導と工場や会社での業務のために、「英語」「スペイン語」「中国語」

と修得する努力の過程が描かれている。この努力は、基本的には「学校教育」で一通りの文法を学び、現場で「聞く力」をつけるため外国人教師につくという方法をとっておられる。そのための学習時間を生活の中からやりくりして、熱心に必死に努力しておられる姿が浮んでくる。キー・ワードは「勉強」「訓練」「練習」「鍛練」であろう。こういった努力・真剣さ・熱心さ・責任感が日本の企業活動の根本にあるエネルギーだと考えさせられてしまう。

このような努力で培った語学力も第9段落と第10段落で述べられているように、つねに使わないとすぐ忘れ、口からすぐ出なくなり、聞きとりもすなりとできなくなることを問題にしておられる。筆者の場合、3ヵ国語の語学力を維持するということであるから、大変なことである。

この忘却との闘いというテーマについて、ローマン・ヤコブソンの「失語症の研究」の中にもあるように、二つのタイプがある。個々の固有名詞や普通名詞が「あれ、それ」という代名詞になっていくタイプと文法構造が分解していくタイプに分けられよう。また、短期記憶（short-term memory）と長期記憶（long-term memory）に分けると、まず短期からのものであろうし、そのことは発音・聴音といった短期記憶レベルのものの方が母国語でない限り忘却は速いと考えられる。そのため、会話能力維持のためポケットラジオを懐にし、のばせ、「聞く力」の鍛練をされ続けている。これは、短期記憶へのすばらしい対応であり、また長期記憶を強化するために、スペイン語、中国語の研究会に出席しておられる。そして結論として、第10段落の後半で「なじむこと。これしか語学力維持の道はないようだ」と語られる。

特に、日本語を母語として育ち、物心ついてから学んだ外国語の場合、忘却との闘い、語学力の維持が課題となるし、そのためには再度その言語圏へ出かけるか、その国語のネイティブ・スピーカーと日本で交流を保ち続けることによって「いつもなじんでいる」状態を作る努力が必要である。

それは、ちょうど地球（日本語）と月（外国語）の間に働く引力の法則で、潮（日本語と外国語の交流）が満ち引きすることをイメージできよう。

図式に示すと、第14図のようになる。

外国語教育の「バビロニア捕囚」からの解放（一）

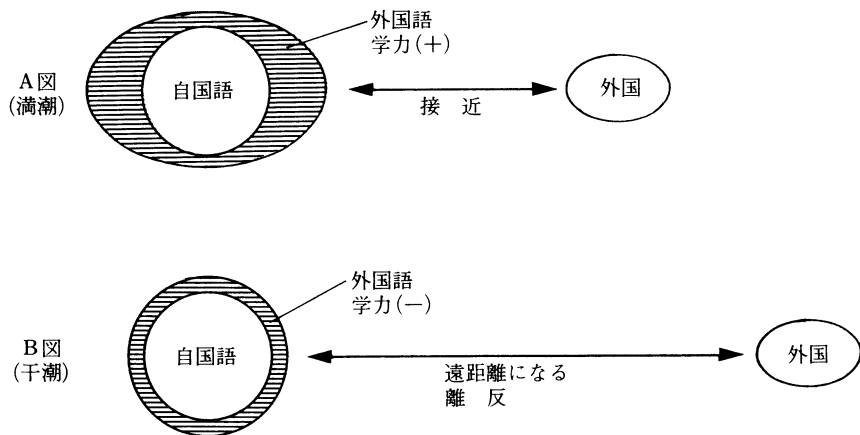


図14

このような物理的必然にも近い外国語学力の低下現象に逆って「努力」するところに、人間の営為の偉大さがあるといえるし、それは大変な困難を伴っている。

これは、第4図で国際関係の接近と離反のところでも論じたが、やはり人間のレベルにおいても、多くの外国人が日本に定住することが進むにつれて、私たちは、その外国語によりなじむということができるようになろう。しかし、外なる壁よりも大きな要素は、内なる心の壁という点も、同時に視野の中に入れておかなければならない。

この筆者の驚くべき努力を成功させたものを分析しておくことは、訓練をかけ声に終らせないために必要であろう。

スティープックが学習を効果あらしめるものとして次の8つをあげているが、この実例に対応させて説明したい。（「」で8つを示す。）

この語学学習は、筆者の言うとうり、『テレビの製造技術の指導を行うために』、というように学んでいるものについての知識が明確である。ふつう「何について学んでいるかという情報を与える」ことなしに、教えられているが、ここでは自覚的に捉えられ、限定されている。

また部品の実物を見せて説明しているように、「もの」と「言葉」に明確な相

関があり、ここでは学ぶべきものとして、「明瞭なものを与える」ということが実践されている。そして、「もの」と「言葉」という二つの間に、十分な「連想」が引き起こされていること」である。そしてさらに、恐らく三ヶ国語の「言葉」の中で、個々の単語に関して、「連想」と「対照」が同時に進行していることが考えられる。

そして、業務上、製造の現場について具体的な場面で、工具や部品を用いる訳であるから、この指導の中でつねに「フィードバックが与えられ、フィードバックを与えている」ことになる。そして、テレビ製造という共通に「意味のある教材が与えられている」ことは、学習にとって大きな刺激である。しかも、それが長期間、毎日、「反復」されているのである。

差し迫った必要性、周りは外国語だらけという状況は、テレビ製造の技術指導というプロセスが相互に「興味ある教材を与えられている」ことと相まって言語の学習と教育を飛躍的に向上させることは確実といえる

つまり、「連想」(association)、「明瞭さ」(clarity)、「対照」(contrast)、「フィードバック」(feedback)、「何について学んでいるかの情報」(theme、purpose)、「意味のある教材」(meaningful material)、「興味ある教材」(interesting material) の8つの条件を全て充している学習環境であることが分かるであろう。

その上、この筆者の責任感からくる努力があればこそ、三ヶ国語マスターということも達成可能であったといえよう。

結びにかえて

「外国語教育の「バビロニア捕囚」からの解放（一）－「私の外国語体験」をコーパスにして」をここで一応しめくくるにあたって、今までの展開を次の目次のかたちでまずまとめておき、次回、続けるための足がかりにしたい。

目次

序

第一章 外国語教育の位置

第二章 言語と人間

第三章 二つの知識

第四章 教えることと学ぶこと

第五章 学びの構造－ケース・スタディ（その1）

第六章 未知との遭遇－ケース・スタディ（その2）

第七章 忘却との闘い－ケース・スタディ（その3）

結びにかえて

序で約束したことで未だ十分に考察できないものも多く、特に日本における外国語（英語）教育を受験のための「手続」としての翻訳・文法教育から救いだすためにどうすればよいか、「学問」と「生活」との有機的なつながりという、より大きな文脈の中に英語・外国語教育をいかに位置づけるべきか、現在の教育はいかにあるべきかを考察したいと述べたが、まだ現状分析がやっと緒についたところで、「べき論」や理想や政策について踏み込んでいない。寛恕願いたい。しかし、第一章から第四章までで一応の言語教育学習の構造など現状を見る視座を論じてきた。この視座から、「私の外国語体験」を読みとり、解釈を続けていくことを当面の課題と考えている。そして、今回は3つのケース・スタディしか行いえなかったが、各々に教えられることの多いもので、金脈にあたって採掘する者の興奮を覚えた。次回以降、このケース・スタディを続けて報告したいと考えている。

参考文献

序

ミッシェル・フーコー『言語表現の秩序』（中村雄二郎訳、河出書房新社、1987）

マイケル・ポラニー『知と存在』（佐野安仁他監訳、晃洋書房、1985）

マイケル・ポラニー『人間の研究』（沢田允夫他訳、晃洋書房、1986）

廣松渉『新哲学入門』（岩波書店、1988）

第一章

日本英学史学会編『英語事始』（ブリタニカ、1976）

第三章

五百旗頭真『日米戦争と戦後日本』（大阪書籍、1989年）

ユルゲン・ハーバマス『コミュニケーション的行為の理論』（上）（河上他訳、未来社、1987）

第四章

Shah, Idries, *Tales of the Dervishes*, (E. P. Dutton & CO, Inc., New York, 1970)

柄谷行人『探究Ⅰ』（講談社、1986）

マイケル・ボラニー『個人的知識』（長尾史郎訳、ハーベスト社、1985）

第四章

佐伯胖『学びの構造』（東洋館出版社、1975）

第五章

久米昭元「逐次通訳へのアプローチ」『時事英語学研究』NoXXIV, September, 1985 以後
の掲載論文、日本時事英語学会

第六章

柄谷行人『探究Ⅰ』（講談社、1986）

吉田一衛編『英語のリスニング』（大修館書店、1983）

第七章

アール・W・スティービック『外国語の教え方』（梅田巖他訳、サイマル出版会、1986）

平川祐弘・鶴田欣也編著『内なる壁』（TBS ブリタニカ、1990）

全体にわたって

Fanselow, J. F. *Breaking Rules*, Longman, 1986, London

日本経済新聞社編『私の外国語体験』（日本経済新聞社、1988）

「バビロニア捕囚」

紀元前597年に始まったバビロニア王ネブカドネザルによるユダヤ民族の数回にわたる強制連行と幽閉。エレミヤ書に詳しい。